

## 博士學位論文要約

論文題目： 武田泰淳中国小説研究  
——中国語資料援用の試み——

氏名： 藤原 崇雅

要約：

本稿は、武田泰淳（一九一二～一九七六）の中国小説を対象に、中国語資料を援用して考察することで、その解釈を更新する試みである。

泰淳は文学史上、野間宏らとともに第一次戦後派に位置づけられてきた。この作家は、自身が僧籍にあった体験、北海道大学への赴任をきっかけとする北方への関心、精神分析学や精神病理学への興味など、多岐に渡るモチーフを作品化したことで知られている。泰淳研究はその出発期にあつてはこうした多様性を包括的に論証しようとしてきた。たとえば、立石伯『武田泰淳論』や兵藤正之助『武田泰淳論』は、『司馬遷』から、『富士』に至るまで、作家の代表作に通底するテーマの析出を目論んでいる。

こうした業績のうえに、さらに具体的な作家研究が展開した。日本近代文学研究において昭和期の作品の考察が増えたことと並行して、泰淳が上海体験や中国文学の受容を踏まえて創作した、いわゆる中国小説が注目されはじめたのである。大原祐治『文学的記憶・一九四〇年前後』や、渡邊一民『武田泰淳と竹内好』は、「審判」をはじめとした上海作品や、竹内好らとともに組織した中国文学研究会での活動を創作營為の中心に位置付けつつ、戦時下から戦後にかけて活動した文学者の中で、中国のことを省察した点で特徴的であるとの作家評価を行なった。泰淳といえば中国のことを思考した人物という理解は以前より共有されていたものの、既存の作家観は緻密な論述の作業を経てようやく実証的に追認されはじめた。

そして、中国小説に関しては、その後も作品論が定期的に発表される、泰淳論の流行と呼んでもよい状況が現出した。たとえば、高橋啓太『「文学」の倫理と背理』や、村上克尚『動物の声、他者の声』は、戦後文学を論じる中で泰淳作品に重要な位置を与えている。ただし、以上紹介した先行論には、不十分な点がある。

序章ではまず、先行研究で展開された議論の不十分な点を三点述べたうえで、それぞれを更新する方法を述べた。

第一点目は、中国語で書かれた資料が十分に参照されていない点である。泰淳の中国小説は、作家の上海体験を踏まえて書かれ、中国文学が典拠とされているにもかかわらず、これまで中国語資料が援用されることもなかった。中国語の資料を用いた作品分析を行うことで、既存の研究を更新できることを説明した。

第二点目は、中国の文化や文学の分析に基づいて書かれた批評理論が参照されていない点である。泰淳研究においても、ほかの近代文学研究と同様に、西洋発の理論が援用されてきた。しかし、泰淳の作品は中国を舞台とし、そこで生み出された文学を典拠としてい

る。したがって、西洋発の理論よりも、中国に関連する対象を通じて書かれた理論を手がかりとした方が、妥当な解釈に至ることができるはずである。中国の文化や文学の分析に基づいて書かれた批評理論を参考にすることで、作品の有する歴史的背景に即した表現分析が可能になることを説明した。

第三点目は、泰渾文学のうち、戦後日本の社会的な話題をとり上げた小説と、中国小説とのあいだに、どのような関係があるのかが記述されていない点である。泰渾が作家として大成したのは、中国小説だけでなく、戦後日本の社会状況を題材とした作品を描いたからでもある。その創作が可能になったのは、中国小説を書くなかで、方法のある程度確立したからだと推測されるが、その方法についても論述する必要がある。中国小説以外の小説において、しばしばとり上げられる「精神分析学」をモチーフとした作品の検討を通じて、泰渾文学に特徴的な方法が析出できることを説明した。

第一章から第七章にかけては、泰渾の中国小説のうち、文学史的に評価の高いものや、中国文学受容の観点から注目に値するものを選び、序章で述べた先行論の問題点の更新を試みた。以下、各論の要旨を簡単に述べる。

第一章では、泰渾が上海から引揚げる間際に、その高い語学力で記したと推定される中国語評論「日本文学的命運」〔日本文学の命運〕を紹介した。上海現地民に向けて述べられる文学史であるこの評論からは、泰渾が本格的に小説創作にとり組む前に、どのような日本文学に親しんでいたのかを知ることができる。泰渾は中野重治の転向文学をはじめとした、政治主義からの挫折として書かれた私小説的な作品について、そのような挫折をせざるを得なかった政治状況が反映されているとする、逆説的な評価を行っている。このような評価は、その後、泰渾が執筆していくことになる作品の方法を予言したものとして読める。上海体験を私小説的な形式を通じて書く発想のおおもとに、独自の日本文学理解があったことを確認した。

第二章では、上海滞在時の立場が私小説の形式で書かれた短編、「非革命者」を論じた。「審判」や『蝮のすゑ』の発表を経てから、上海小説としては最も後期に発表された作品である。この作品において泰渾は、ただ単に上海で生活した自己を書いたのではなく、そこで自身をとり巻いていた状況を、よく対象化して主人公の自意識の周囲に書き込んだ。「非革命者」を、イデオロギー的には親日的である一方で、実際には法規によってぎりぎり生きているだけの状態に留め置かれた上海居留民の生の様態を、諷刺的な作品構造を通じて記録した一編として解説した。

第三章では、泰渾の出世作である『風媒花』と、J・P・サルトル『自由への道』の共通性について検討した。『風媒花』の自作解説の中で『自由への道』への言及があるものの、その内実はこれまで詳細に論じられてこなかった。本稿では、邦訳全集が発行され広く読まれはじめたサルトル小説の時間の表象について『風媒花』との共通性が認められることを述べ、戦後日本という舞台が世界文学の方法を通じて提出されたことを論証した。具体的には『自由への道』のうち、情景法という描写の速度を物語内に流れる時間と等速にする手法と、登場人物の視点を頻繁に切り替える手法が、『風媒花』にも使用されていることを論証している。そのうえで、本作がサルトルによる通俗マルクス主義批判を踏まえつつ、中華人民共和国成立期を舞台とし、体制の異なる国家の建設が歴史の進歩的段階

ではなく、連続的に流れる時間の一部として表現されていることを明らかにした。

第四章では、泰淳が中国を題材とすることから離れて、戦後日本の社会的な話題をもとに小説を書いていることを述べた。一九五〇年代、一通りの上海小説を発表し終えた泰淳は、精神病や「精神分析学」をモチーフとした作品を発表した。作品名を挙げれば「幻聴」や「動物」、「恐怖と快感」などがある。多様な話題を無理なく作品化できた背景には、中国小説を創作する中で体得された方法があった。『風媒花』においては、情景法の代表的な文体として、会話の言説が採用されていたが、その書き方を基礎に、泰淳は中国小説以外の作品を創作していったのである。初刊の「あとがき」において、「精神分析学」を批判したことが明言される短編「恐怖と快感」の構造を分析した。

第五章では、再び中国作品である「渺茫たるユ氏」と「うつし絵」をとり上げ、中国文人である俞平伯の評論がいかにかに受容されているのかを詳らかにした。泰淳は「渺茫たるユ氏」においては、俞平伯の雑文を皇帝権力への批判と位置づけていたが、「うつし絵」では一転して、文人がそのような批評的立場を消失したことが印象づけられる。もともと俞平伯は政治に関わっていないようであり、高度なレトリックを通じて批判を行う〈隠退 Passivity〉の文学者であったが、その態度は次第に、ただの隠居に過ぎないものへと変化したと、泰淳が捉えていたのである。そのうえで、一九五〇年代半ば、中国において発生し、古典文学研究の大家である俞平伯がマルクス主義批評の立場をとる青年らに批判された議論である『紅樓夢』論争に反応して、「うつし絵」が書かれていることを論述した。

第六章では、『紅樓夢』論争が日本において紹介された言説それ自体をとり上げ、同時期における日本の知識人の中国に対する態度を、より詳細に検討した。日本の知識人たちは、俞平伯を批判した青年らを支持し、対して新聞メディアは、苛烈な思想改造の一貫であるとして論争を報道した。しかし、村松暎という研究者は論争に対して特定の判断を下すのではなく、自らの白話小説理解を踏まえたうえで、議論に参加していくような論文を発表した。この論文では、俞平伯もマルクス主義批評も、それぞれに批判が加えられつつ、自らの見解が公にされている。村松が、議論を判断によって収束させるのではなく、論争に存する弁証法の枠組を保持するような、独特の言説を提出していたことを証明した。なお、この章は泰淳作品の論ではないものの、同時期の中国文学者をとり上げることで、泰淳の意見を相対化するために設けた。

第七章では、『中国忍者伝 十三妹』を対象に、白話小説という中国清代に隆盛した文学を、泰淳がいかにかに受容しているのかを明らかにした。『十三妹』のプロットは、主要な典拠である『儿女英雄伝』を、ちょうど転倒したものとして理解できる。本作は、家庭の妻でありたい女性主人公が、その活躍を聴きつけた人々らによる期待の力学により、民衆を代表する存在として主体化される物語となっている。そのことを、典拠との比較から解明したうえで、主体化がヒロインにとって暴力として作用していることを、十三妹がたたえている寂しさに注目しつつ論じた。また、泰淳が初刊の「あとがき」で言及する中国現代文学『紅岩』をとり上げ、女性を共産党員として主体化するにあたって、『紅岩』が反省のない作品であるのに対し、『十三妹』は女性の主体化が、たとえ積極的な価値を有したものであっても、彼女自身の声を篡奪してしまう可能性に意識的であることについて明

らかにした。

以上の分析結果を踏まえ、終章では、泰淳の中国小説が〈国共対立期テキスト〉として捕らえられることを述べた。〈国共対立期テキスト〉とは、「中国近代史上、国民党と共産党が対立していた時期に書かれた文学作品」という定義において使用している。泰淳は梅崎春生や野間宏など、戦後まもなく小説家として活動をはじめた世代、第一次戦後派の文学者として、文学史上整理されてきた。このため、たとえば中国を舞台として書かれた小説も、戦争責任をはじめとした日本国内における知識人論の文脈で理解されてきた。二〇〇〇年代に入って「審判」の作品論が多く発表されたのも、一九四〇年代や戦後という時間軸において日本近代文学を捉え直す研究が多く書かれたからである。しかし、泰淳文学を日本の戦後という時間の中だけで読むことは、泰淳文学が持つ歴史的背景を捨象してしまうことでもある。

本稿では中国語資料を用いた分析の結果、泰淳の小説において国共対立を背景とする特殊な歴史的な文脈が書き込まれていることが明らかにした。たとえば、第一章で紹介した文学史は、中国語で書かれていることから、上海の人々に向けて発表されたものであることが分かるし、第二章で扱った「非革命者」では、国共内戦の文脈が法規によって日本人居留民の生き方を緩やかに規定していたことが分かる。また、第三章で扱った『風媒花』では、中華人民共和国の成立が日本国内において中国のことを考える人々の立場を分岐させたことが書かれていたし、また第五章や第六章では、体制変更後の中国で起きた文芸論争をめぐる、日本の文学者たちが反応したことが分かった。さらに第七章では、泰淳が白話小説を通じて、中国現代文学批判を行っていることが明らかになった。総じて、泰淳の中国小説は、国民党や共産党が自らの正統性を主張する歴史的動向の渦中で書かれていたのであり、作品表現にはそのことを示す歴史性が埋め込まれているのである。

清朝において政治体制が大きく変更し、中華民国が形成されたとはいえ、中国はその後、長い内戦の時期に入った。国民党と共産党、さらに第三第四の諸勢力が競合し合う、混迷の時期に入っていたのである。狭義の意味では一九四九年に、国民党の台湾撤退をもって内戦状態は終結したが、しかし今日に至るまで、対立状態が終わりを迎えたわけではない。二〇世紀の大陸およびその周辺地域は、国共対立の季節であったのであり、また今後もしばらくはそうした時期であり続けると考えられるだろう。そして、こうした歴史的動向を背景に、東アジアではさまざまな文学作品が書かれ、また読まれた。中国共産党が人為的に作り出した人民文学は総じてそうした表現である。

おそらく、日本人が公にした文学の中にも、こうした歴史動向と関係あるものは多くあるはずである。一九四〇年代後半より後に書かれた日本語の文学は、ひとまず戦後文学という名称によって整理され、それを前提とする文学史的記述が書かれてきた。もちろんそれは、妥当性を持つために戦後文学という名称が使われていたのだが、ただし中国と関わりをもつ作品に関していえば、そのような名称による理解は作品表現のうち、特殊な歴史的な事象を背景化してしまう。日本の戦後文学は、同時に国共対立期の表現としても書かれているものがあるはずであり、そうした作品は中国語資料を援用して読むときにこそ、その作品のもつ特殊性が明らかになるのである。本稿は、近代文学作家の中でも、特に中国小説を継続的に発表していた泰淳の作家研究を通じて、戦後文学をめぐる文学史の再考を促

すような視座を提示する試みである。

付録では、日本近代文学館所蔵のコレクションから、泰淳の代表的長篇である『富士』の草稿類と、未発表作品の一部と考えられる「ある近代的な物語り、精神病患者の物語り」を翻刻・紹介した。これら資料は、中国小説に関係したものではない。しかしながら、精神分析学や精神病理学といった、精神病者をめぐる学問は、泰淳作品のうち中国小説以外の小説において、重要なテーマとなったものである。そのことは、本論の第四章で論じたが、泰淳の斯学への関心の詳細を解明するうえで貴重なものと考えられるため、これら資料をとり挙げ、研究状況の更新をはかっている。

主な引用文献・参考文献：

- ・立石伯『武田泰淳論』（一九七七、講談社）
- ・兵藤正之助『武田泰淳論』（一九七八、冬樹社）
- ・小嶋知善「武田泰淳『十三妹』論」（『目白大学短期大学部研究紀要』二〇〇二・一二）
- ・郭偉「武田泰淳と現代中国の知識人」（『社会文学』二〇〇四・六）
- ・川西政明『武田泰淳伝』（二〇〇五、講談社）
- ・松本陽子「武田泰淳「非革命者」論」（『阪大近代文学研究』二〇〇五・三）
- ・村上克尚『動物の声、他者の声』（二〇一七、新曜社）
- ・高橋啓太『「文学」の倫理と背理』（二〇一七、中川書店）
- ・李娜娜「一九四七年前後武田泰淳の中国観」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二〇一七・三）
- ・宮澤隆義「帝国と忍びたち」（『G-W-G』二〇一八・五）